北秋田市の木・鳥・花

秋田県北秋田市の「市の木」「市の鳥」「市の花」は、2006(平成 18)年 4 月 1 日に制定されました。

4 つの町(鷹巣町、合川町、森吉町、阿仁町)が合併（2005(平成 17)年 3 月 21 日）した翌年、市民公募や選定委員会での選考を経て、新市のイメージにふさわしいシンボルとして正式に告示・施行されました。それぞれのシンボルは以下の通りです。

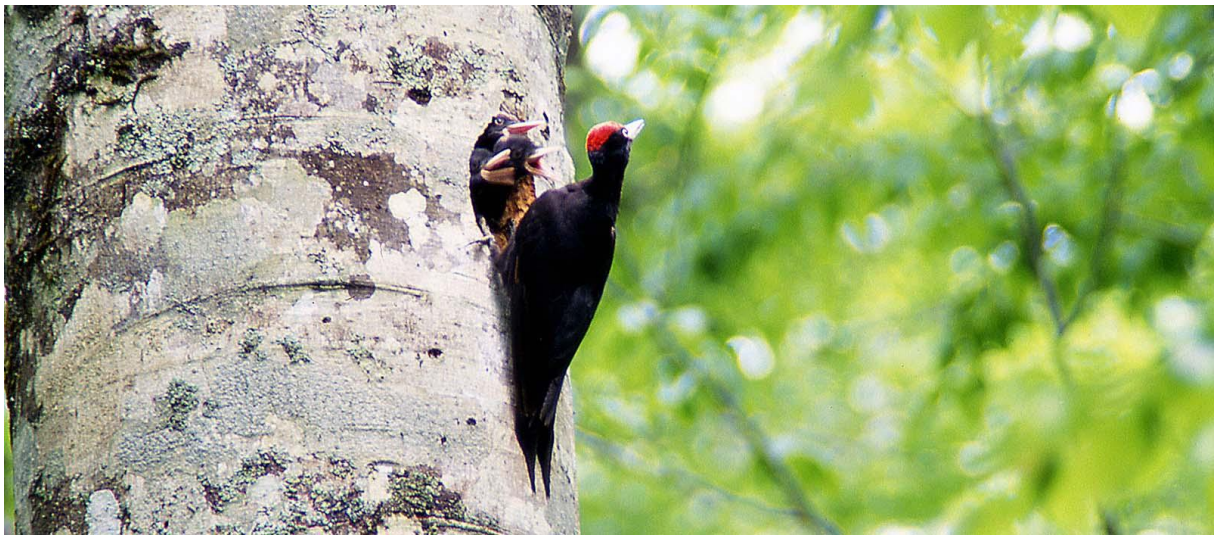
● 市の木：ぶな（ブナ）

水源を蓄える役割を持ち、森吉山麓をはじめとする豊かな自然を象徴する樹木として選ばれました。



● 市の鳥：クマゲラ

国指定森吉山鳥獣保護区(総面積：6598ha、うち特別保護区：1573ha)の広大なブナの原生林に生息する希少な鳥(キツツキ)で、自然保護の象徴とされています。



※クマゲラは体長 45 ㎝、6 ㎝程の長いノミのようなくちばしを持ち、真っ黒なマントに
真っ赤なベレー帽、目は黄色縁の眼鏡をかけた日本最大のキツツキです(親雄とヒナ三羽)。

※杣人たちがクマゲラを岳(だけ)ガラスと呼んでいたと聞いたことがある。妙に合点がいく。

● 市の花：あじさい（アジサイ）

市内の至る所に植えられており、日々変化する花の色に、これからの市の発展への願いが重ねられています。



※北秋田市の里山からブナ林に自生しているエゾアジサイ

エゾアジサイは北海道、東北、北陸、中国地方の日本海側、及び九州の山地（多雪地）に分布している。７月～８月にかけて、中央に小さな淡紫色の「両性花」を多数咲かせ、その周囲を大きな鮮やかなブルーの「装飾化（ガクが変化したもの）」が採る。土壌の酸性度などによって色が変化するが、自生地では鮮やかで涼しげな薄青色から青紫色の花を咲かせることが多い。（山渓カラー名鑑　日本の樹木より）

＜市の花は自生種のエゾアジサイ（蝦夷紫陽花）を仲間に＞

私たちが現在よく目にする手まり咲きのアジサイは、江戸時代末期（1823 年）に長崎に来日したドイツ人医師で植物学者のジーボルトが、最愛の日本人妻「お滝（楠木滝）さん」の名前から名づけた「**おたくさ**（お滝さん）」を、オランダに持ち帰り観賞用に品種改良したものです。豪華に改良された「おたくさ」は、のちに日本へ「逆輸入」の形で里帰りし、鮮やかなアジサイとして街中で目にするようになりました。

1990 年代にオランダでシーボルトが持ち帰った本物の「おたくさ」のクローン株が確認され、日本に里帰りした子孫が流通し、目にする事ができるようになりました。

シーボルト縁りの地である長崎市では、「市の花」を品種に関わらずアジサイ全般を指定しています。「おたくさ」や「お滝さん」の愛称で広く親しみ、漢字で「紫陽花」と書いて「おたくさ」と読ませるほど、地域に深く根付いているそうですます。

さて、北秋田市にはユネスコの世界文化遺産伊勢堂岱縄文遺跡（紀元前約 2000～1700 年）があります。その時代の東北地方は、海岸線に近い丘陵地までブナ帯の森（落葉広葉樹）に広く覆われていました。そして、我々の先祖はこのブナ林の生活空間に「ブナ帯文化」を育んできました。その森の象徴は**クマゲラ（日本最大のキツツキ）**であり、縄文集落に広く自生してきた**エゾアジサイ**であって、オランダで品種改良され、逆輸入された**西洋アジサイ**（Hydrangea otaksa）ではありません。

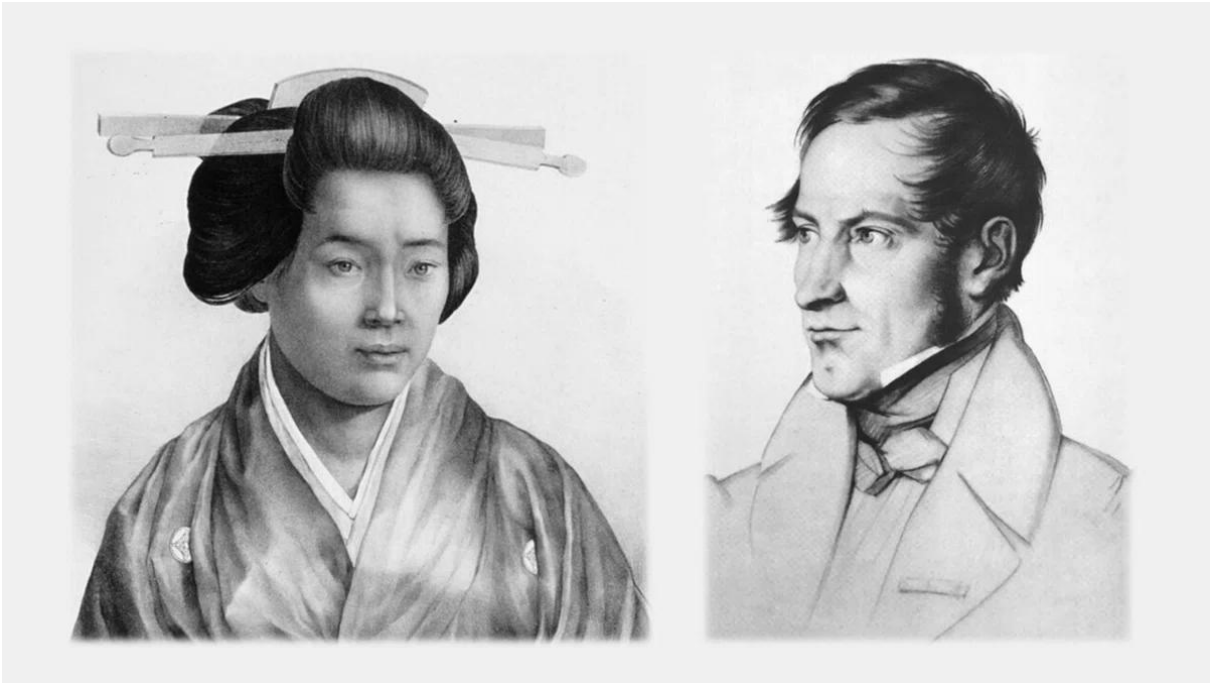
市の木：ブナ、市の鳥：クマゲラに並べる**市の花：アジサイの看板写真**は、北秋田市の里山からブナ林まで広く自生する**エゾアジサイ**を加えなければなりません。

１．シーボルトが持ち帰ったオタクサのスケッチ図

シーボルトのお抱え絵師：川原慶賀（かわはらけいが）らによって描かれた植物図鑑は、学術的な正確さと芸術性を兼ね備え、ヨーロッパの研究者たちを大いに驚かせました。その代表的な一枚が、このアジサイの図です。



２．シーボルトとお滝さんの肖像（絵師：川原慶賀　作）



３．花の名前に隠された「オタクサ」の物語

しかし、このあじさいの紹介には、シーボルトの個人的な深い想いも込められていました。

シーボルトは長崎滞在中、生涯の恋人となる日本人女性・楠本滝(お滝)と出会います。当時の厳しい鎖国制度のもと、出島への出入りを許されるために彼女は「丸山の遊女・其扇(そのぎ)」という籍を借りる必要がありましたが、二人の絆は本物でした。二人は出島で共に暮らし、後に日本初の女性産科医となる娘・イネを授かります。

ところが 1828 年、運命を揺るがす「シーボルト事件」が発覚。国外持ち出しが禁じられていた日本地図などを所持していたことが問題となり、シーボルトは国外退去・終身再渡航禁止の処分を下されてしまいます。愛するお滝と、まだ幼いイネを日本に残したまま、彼は引き裂かれるように祖国へ帰らざるを得なくなりました。

帰国後、シーボルトは日本調査の集大成として、生涯をかけて大著『日本植物誌』を出版します。その中で彼は、あじさいの園芸品種の一種をこう命名しました。

Hydrangea otaksa(ハイドランジア・オタクサ)

「オタクサ」それはもちろん、愛するお滝さんの名前に由来するものでした。さらに彼は、その著書の中にわざわざこのような言葉を残しています。

「わたしが日本で愛した女性の名を記念して、この植物にその名を与える」

海を隔て、二度と会えないかもしれない最愛の女性への想いを、彼は科学の記録として永遠に世界へ残そうとしたのです。これは植物学史の中でも、特にロマンチックな献名のエピソードとして語り継がれています。(ネット検索資料抜粋)